はじめに

本書は、私のウェッブサイト上のブログ「小閑雑感」から、2005 年 7 月から 10 月までに書いた 88 篇をまとめたものである。前著『小閑雑感 Part 4』に引き続いて単行本として上梓できることは幸運である。なぜなら、自分の表現したものが電子媒体から印刷媒体へスムーズに移行する機会をもっている人は、まだまだ数が少ないからである。

前著を発行した時点では、私は自分のブログと、それまでの普通のウェッブサイト(ホームページ)の違いをあまり意識していなかった。両者の違いは、自分の文章や写真をインターネット上に掲載する際の簡便性の違いぐらいだと思っていた。しかし、実際にこれを使い続けていると、私の執筆方法に微妙な変化が現われてきた。以前の「小閑雑感」は、その題名の通り、暇な時間を見つけて書いた随想だった。だから「小閑」がなければ書き込まなかった。しかし、ブログは「オンライン日記」が建前だから、小閑がなくても何かを書くべしとの無言の要請がある。そこで、とにかく何かを書いてみる。

このように、「何のために書くか」はさておいて「とにかく書く」ことをしていると、書いたもののうちどれかが、後になって講話や印刷媒体のための執筆につながることがある。すると、ブログを書いていなかった時と、書いていた時との間に、講話や執筆のテーマ・発想に微妙な違いが出てくるように思うのである。この違いは些細なものかもしれないが、それが度重なると、しだいに大きな違いとなる可能性もある。そういう意味では、ブログはあくまでも雑文集であり、雑感集である。完成された「作品」集などではなく、あくまでも「とっかかり」集である。だから読者は、その中に何か決定的なことを探すのではなく、私の日常的な「思い」や「興味」の吐露の場として、また、「発想の揺籃」としてそのまま受け取り、私という人間を理解してくだされば幸いである。

しかし、そうは言っても宗教家なのだから、ちゃんとしたことを言ってほしい、という抗議が来るかもしれない。私もそれに同感するし、そのための努力もしている。それはブログの中で“続き物”を書くことだ。すでに前著に於いても、「芸術は自然の模倣？」というシリーズが３回の続き物として掲載されたが、本書では同じテーマで、さらに３回続けている。そのほか「ロンドンのテロ」「スーフィズムについて」「石油高騰の“効果”は？」も同様の続き物だ。注意深く読んでいただくと、このほかにも実質的な“続き物”となっている文が結構ある。それは表題が違っても、前に書いた文章を受けて書いたもので、そのことを文中で「〇月〇日の本欄で」などと明確に表示している。インターネット的な表現を使えば、「リンクを張る」努力をしているのだ。読者は、そのリンクをたどることで“続き物”を読むのと似た効果を得られるはずである。

本書でカバーした４ヵ月間を概観してみよう。

哲学・宗教の分野では、2005 年の夏、日本で生長の家教修会、アメリカで幹部研修会が行われた。その頃、アメリカでは、生物進化の背景には「知性による設計」があると主張するＩＤ(インテリジェント・デザイン)という考え方が問題となり、これを「神への信仰」だと考える科学者たちが、学校の授業にこれを取り入れることに猛反対した。また、この年の教修会でイスラームの教えが取り上げられたことを受けて、本ブログでは「神と人との合一」を説くスーフィズムを６回にわたって説明した。あくまでも入門的な説明だが、イスラームの伝統の中にも「人間・神の子」の教えと共通するものがあることを知っていただきたかった。

ところで、「芸術は自然の模倣？」と題するシリーズは、もちろん「芸術」に関するものであるが、実は哲学的にも重要な問題を扱っている。それは「正しい認識はどうやって成り立つか」を論じる認識論の分野である。生長の家では仏教と同じく「唯心所現」を説くが、これを哲学的にどう理解するかについてのヒントが、ここにはある。「心で世界をつくる」(10 月９日)と併せて読んでいただくと分かりやすいかもしれない。

地球環境問題では、アメリカ南部を襲ったハリケーンを中心に氷河の退縮、北極の氷の縮小と北極海の開発、ペットボトル入り飲料水の問題などが取り上げられている。この中では、台風やサイクロンを含めたハリケーンの“凶暴化”は、地球温暖化の影響であるという科学者の見解が重要である。明るいニュースでは、生長の家の関連施設や信徒の自宅などへの太陽光発電装置の導入が順調に進んでいることが、報告されている。また、トヨタ自動車が日本よりアメリカを優先してハイブリッド車を出すことに抗議して、「拝啓、トヨタ自動車殿」(７月 27 日)という一文を書いた。

エネルギー問題では、何といっても石油価格の高騰だろう。これは、直接的にはアメリカ南部の油田地帯を襲ったハリケーンの被害と、イラク戦争の影響によるものだが、背景には中国やインド、ブラジルの急速な経済成長による需要増大、そして「石油ピーク説」の存在がある。石油高騰は一見して“悪い”現象のように受け取られるが、私はここから新しい、建設的な変化が生じる“善い”兆候を読み取って「石油高騰の“効果”は？」という文章を２本書いた。また、「原油高は一時的？」と題して、石油の高騰が、温暖化効果の少ない植物性ディーゼル燃料の開発を促進していることに触れている。

今日のエネルギー問題は即、経済問題であり、国際政治問題とも結びつく。本書のカバーする期間に国際政治で起こった大きな事件は、７月の「ロンドンのテロ」である。ブログではこれを４回にわたって取り上げ、自爆テロ実行犯が西洋社会の「内部」から生まれ

たことに注目して、「自己アイデンティティーの危機」という文化的な心理的葛藤と、社会的疎外という社会的な心理的葛藤が加わったうえ、メディアによる「西洋対イスラムの戦い」のイメージが強化されてテロが実行された、という仮説を掲げている。当っているかいないか分からないが、参考にしていただければ幸いである。

歴史教科書の問題は本来、教育問題である。しかし、わが国では首相の靖国神社参拝とも関連づけられ、中国や韓国を巻き込んだ政治問題になってしまっている。政治運動から遠ざかって久しい生長の家は、したがって左右のいずれにも与するつもりはないが、両者に欠けている観点を記した文章を「歴史教科書の見方」と題して書いている。

遺伝子・生命倫理の分野で重要なのは、再生医療の手段として胚性幹細胞（ＥＳ細胞）と成人幹細胞のいずれの利用を“本道”とするかの判断である。私は後者を主張するが、世の中は前者の方向に動いているようである。ところが今回、受精卵を壊さないでＥＳ細胞を得る実験がマウスで成功した。（10 月 17 日）“第３の道”と呼べるかもしれないが、まだ人間では確認されていない。今後の動きが注目されるが、この方法に問題がないわけではない。というのは、ＥＳ細胞に“劣化”の可能性が指摘されているからである。（９月５日）

最後に、本書と私のブログを応援してくださるすべての人々に謝意を表したい。前著の「はじめに」では、私のサイトへの訪問者は１日約 300 人と書いたが、この文章を書いている時点では、それが「600 人」前後へと倍増している。ブログから月刊誌への転載が増えていることや、前著を講習会のテキストとしたことも関係しているだろうが、喜ばしいとともに責任の大きさを感じる。諸賢のさらなるご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

2006 年３月 16 日

谷口　雅宣　拝

Masanobu Taniguchi

電子署名者：Masanobu Taniguchi
DN: cn=Masanobu Taniguchi, c=JP - 日本, o=SNI International, email=masanobu.taniguchi@nifty.ne.jp
理由：この文書の著者
日付：2006.08.13 13:34:39 +09'00